

# 昼寢覚

森岡 正作

予科練の基地を昔に青田波  
昼寢覚しばらく人を窺へり  
夏野にも区画ありけり馬防ぎ  
梅雨深む鼻緒の太き父の下駄  
はじき豆一男二女を育てけり  
山荘に火蛾の狂ほし貴腐ワイン  
ワイン乾杯どこかに黴の育ちをり

角川「俳句」8月号掲載4句

## 滴りや

父は退職後、悠々自適というか、座布団一枚があれば良いというような生活をしていたが、夏は好んで林の杉の下刈りに私を連れ出した。林とはまさに杉の林立した地域を言い、そうした地域を含め、他の樹木が繁ってこんもりした所が森、さらに森が奥深くより高くなったのが山である。林や森、そして山も一緒のようなものであるが、その中に入れば別世界であり、湧き水があったり滴りがあったりする。言わば格好の休憩場所であり、ともかく涼しいのである。

登四郎先生に「滴りや次の滴りすぐふとり」という句がある。私も両の手のひらを合わせ、滴りを受けては、上を見つめて次の滴りを待った。小粒の球体が太り、表面張力が限界に達して弾けるように落ちて来る。その木漏れ日に染まる滴りの輝きは神々しい。金剛の一粒と詠まれた「露」、連山の影を映すと詠まれた「露」も神秘的である。それゆえ「滴り」も「露」もすぐ消えるものでありながら、その一瞬の輝きは人間に充実感を与えてくれる。先生の御句にも写生から写生を越えるものを感じることができるのである。